

■全体の感想。

コーランで言われる義さとはなんなのか、その時代、その場所で精一杯誠実に生きるということではないか。その時代に、誠実に生きるということが具体的になったときに孤児を大切に、寄付をする、女兒を殺さないなどの実践の形式があらわれたのではないか。

コーランは商人が力を持つ土地柄で、マホメット自身もそれなり商人として行きつつも、しかし商人として金を儲け金持ちになり格差に目を向けたり、社会への還元をおこなうことなく平然と生きることには公然と反論している。今であれば、当たり前前の考えかもしれないが、こんなこと一つとっても実は当時は相当の圧力があつたのではないか。でも、だからといって1300年前の人間が格差を生み出し、貧しい人を見ないようにしながら生きること、全く良心の呵責を持たなかったといえそうではなかっただろうと思う。その良心の呵責に気づき真摯にそのことと向き合い、貧しい人への分配を始めたのがマホメットであり、それに同意する人たちがいた。そして、良心の呵責に向き合えない人たちに攻撃されたということはある話なんではないかと思う。

例えば、現代的なこととして考えると、特段悪いことをしているわけでもない、むしろまっとうなことをしている人が炎上することがある。この状況はコーランでの状況と比べて考えられる部分もあるのではないか。アッラーが再三コーランで邪信徒(単なる異教徒ではない)に対して地獄の話をし続けたのが理解しがたかったが、そういう風に考えると納得できる部分もある。あまりに理不尽な炎上にはもうほんとになんなんだと言いたくなるだろうと思うし、彼らがよい未来を思っているとも思えない。

いや(語って聞かせるまでもなく)、人間はみんな自分が自分の(してきたことの)このよない証人(あかし)。たといどれほど言いわけを持ち出そうともむだなこと。[七五復活14-15]

■旧約聖書との違い

神が不信仰を嘆くのは旧約の頃から変わらない。しかし、旧約の場合はユダヤ教徒(民族)というその宗教の中にいる人の不信心を嘆いていた。コーランではそもそも信じない人は信徒ではない。まさにイスラム＝帰依という感じがする。

■コーランにおいて最後の審判での基準

勘定を大事にしているのなかなか気づかなかつたけど、単なる足し引きだけではなく実はある大前提を満たしていないとどれだけ良い行いをして天国には行けないし、それを満たしていれば多少の勘定の悪さは見逃される。それは神に帰依していること、そしてこれと別々に考えることではないかもしれないが最後の日を信じていること。

進行にはいって義しい行いに精出し、ムハンマドに下だされた刑事を、己が主の下し給うた真理として、信ずる者、こういう人たちだけはたとい悪事を犯そうとも、必ず(アッラーが)その罪を浄め、心を正してください。[四七ムハンマド2]

アッラーは何度でも許す神だという記述も何度もあつた。

勘定自体は、この信じるという前提のあとに始まるようなものとも言えるし、信じることで体がそもそも膨大なプラスに働くと考えてもいいのかもしれない。信じるということを先に書いた誠実に生きることとイコールとするならば、これも割と納得の行く話で、本当になにか真面目にやろうとしている人が、よいことや理想の未来のために行動を起こし、それでも間違えたり、上手く行かなかつたりするということは許される。それは、特に考えもなくなにかを適当にやっただけで成功したり、間違えたりするのはわけが違う。ましてや、そもそも悪い心から出てきたなにかとは大違い。誠実さやよい未来を達成しようとする人は、間違いを含みながらも行動していく必要がある。

■天地創造、生と死

まずは余談だけど、下巻は自然信仰っぽさもあるな(星にかけて、とか、月にかけて)思った。

天地創造、生と死はコーランでももちろん神が司っていて、何度も何度も語られる。今では天地創造についてはかなり科学的に解明されてしまって、生と死もある意味ではそう。でも、コーランが現れたころ、そういうことが全然わからなかったときに、自分では理解も出来ず、どうすることもできないようなものの根拠をどこに置くかというときの選択肢として一神教の神というのはありえただろうと思った。

今でも死を扱うことは宗教の根拠として秀逸である気がする。医学的には人間の死は、基準があるだろうが、それはある人の自分の死の理解に対して満足な答えを出しているとは思えない。今でも、コーランの考えを簡単に否定できるわけではない。

見よ、我ら、ここに、間近く迫った天罰を汝らに警告する。[七八知らせ40]

啓示は、啓示自体から1400年も経ってしまった今はクッションが効いてしまうけど、当時の人には身に迫るものだっただろう。

■神が世界を作ったと思って世界のことを考えてみる

やはり信心はないのだけど、こういうふうに考えてみることはやってみた。コーランの教えは来世を重要視するけれど、天地創造の思想は来世を重要視するというか、遠い未来のことを思うことと相性がよいように思った。

窓の外の山々は街を、これが神の、ある一つの人格のようなもの作り出し、デザインし続けている世界だと思って眺めた。

誰かひとりの想像であるという世界観を持つことは、世界を逆に広く感じさせる。自分一人がよければいい、そういうのとはちょっと違う感覚を持てる。自分の目の見える範囲で世界が出来ていく、局所的に勝手にやっているというイメージではない。地球の全部を扱っているなにか(=神)、しかもそれは地上には存在しない、がいるというふうに想定しながら考えてみることは、自分が生きていくことだけを考えていくよりも、この大きな世界で人々はどう生きるのか、どう生きることがいいのかと考えることと相性がいいと思った。天からの眺めを想像することで、集団としてどう生きるのかという視点をもちやすい。わたしがどう生きるのかというのは地上の視点だと思う。